

意識 北海道砂金案内 附録

へるふね Perupnei

目次

北海道砂金案内は明治33年5月、蓑田政徳が著し、若菊生によって編集されたものである。本書の巻末には、附録として当時東京で発行されていた日刊紙「二六新報」の記事が掲載されている。この記事の真偽は不明だが、当たらしとも遠からずで、読み物としては非常に面白い。本書はその記事を意訳紹介するものである。

●北海道の砂金

○枝幸砂金の発端

今日、砂金と言えば「クロンダイクか枝幸か」と言われる程、枝幸の名が響き渡っている。北海道の砂金が盛んになったのは全く枝幸のお陰であり、ここに、枝幸で初めて砂金が発見された顛末を述べる。

そもそも、北海道の砂金の歴史は古く、各地で盛んに採取されていたが、枝幸住民はそれを知らず、日食観測のため来日した外人が、枝幸に砂金が出ると言っても、全く気にせず漫然と日々を送っていた。ある日アイヌが、魚を採ろうとウソタンナイ川を遡り、山奥の岩陰で光る石を見つけた。光輝燦然目がくらむとまでは言わないが、とにかく山吹色に光るので、下には置けぬものと、持ち帰ったのである。

○宝を抱いて嘲弄さる

アイヌは、知り合いの鈴木某にその石を見せた。この鈴木という男、会津の出であるが、4～5年前一家そろってやって来て、漁夫として50の坂を超えた身を、北海の風雪に晒して働いていた。しかし、不漁が続き生活成り立たず、妻子も離散、一人留まって露命を繋いでいたのである。

アイヌが示した山吹色を見て、「これは金である」と言ったかどうかは定かでないが、自分も探してみようと搜索に入った。すると難なく山吹色が岩の上に転がっているではないか。これは天の恵みと押し頂き、大急ぎで仲間の男に相談すると、その男は砂金に多少の知識があるらしく、「これは砂金に違いない、砂金は川の中にあるものだが、それが岩の上に転がっているのなら、一面砂金だらけかもしれぬ」というのを聞き有頂天になった。そこで、「陶朱掬頓になるはこの一撃にあり」との大々の野心をもって、ありもせぬ家財道具を質に置き、米と塩とを買込んで、不完全極まる、ネコとカッチャを携え、いよいよ採取に取りかかったのである。

器具は粗末でも採取は下手でも、これまで一度も掘られたことのない場所である。採れるわ採れるわ1日15匁を下ることはなく、多い日には30匁以上になることもある。

1 匁 4 円で 20 匁採れるとすれば 80 円の稼ぎだ。その年のうちに 6 千円以上の財産家となり、離散した家族を呼び寄せて、一家そろって会津へと凱旋、大いに錦風を吹かせたうえ、また枝幸に戻って 1 戸を構えた。

ここで一言申し置くが、この鈴木某、財産はできても智恵はできぬと見え、一生懸命掘っている間、抜け目なき連中は先を争って鉱区の出願をした。文字の読めぬ鈴木先生、何にも知らずにいつもどおり掘っていたら、「オイ！ このヤマの鉱区主はこの俺だ」と言われ、今では採取料を払って掘っているようだ。

○漁師砂金掘りとなる

ここに、鈴木同様、砂金掘りになった漁師がいる。打ち続く不漁で生活ままならず、困り果てていたところ、鈴木から砂金の話聞いた。

早速ネコを作り、親方から給料代わりに米を受け取って、砂金の搜索に出かけた。6 日目にしようやく砂金にたどり着き、2 週間程で千円ばかり儲けた。するとその同僚も米を受け取り砂金掘りとなった。そのうちにこれをかぎつけて、四方から入り込む者数知れず、たちまち千人以上の採取者が集まった。

枝幸の評判響き渡り、付近住民はもちろん、他所から砂金地に入る者日々数百人に上り、皆先を争い、熊笹をかき分け、峻坂をよじり、溪畔に沿い、蚤取眼で探索し、四方八面往来織るが如く、甲の掘るところ獲物多きと見れば、乙丙走って集まるという有様で、互いに場所を争って大喧嘩となり、手に持つカッチャを振り上げて、負傷者毎日 5～60 人は下らずという。

○支庁長の溜息談

枝幸砂金地に来る者は、いずれも「目に一丁字なき者」なれば、砂鉱条例何たるものぞの密採者である。支庁長たる者、職務上取り締まりを行わない訳にはいかず、少しでも密採者が入り込まない様にと、警官を動員して取り締まりをしたのだが、何分多数の密採者であり、その功なきに気をもみ、果ては支庁長自らウロウロしている者をひっ捕らえ、「お前達、まさか砂金採りに来たのではなからうが、もし砂金を採るのなら、きちんと手続きを踏んでから行おうべし」と諭すが如く、脅すが如く、懇願するが如く説法すれども、「へーい！ 承知しました」と上手くその場を逃れられ、一目散に砂金地目指して走り去るとは、宗谷支庁長長松雄之進の溜息談である。

○枝幸市街の俄繁盛

砂金発見と同時に、今まで閑散とした枝幸市街は、俄かに幾千人の砂金掘りであふれ、その羽振りの良さは筆舌に尽くしがたい。

枝幸の名声広がって以降、四方八方から人が入り込む。そうなると一番に混雑するのは宿屋である。元来枝幸は北辺の地で、交通不便の所であれば、宿と名の付くものは6軒で、いずれも日々10人以下のお客を相手にしていた。

ところが、一朝にして大洪水の如く人がなだれ込み、5軒や10軒の宿では賄い切れるものではない。このためいずれの宿もお客が充満、立錫の余地なしどころの騒ぎでなく、人が重なり合い、あくびをしては人の口に手を突っ込み、尻が痛いと思えばいがぐり頭を押し付けられという次第で、宿屋の混雑は実に大したもの、よってその実入りも驚くべき額であった。

○北海道始まって以来の大繁盛

宿屋以外の景気はどうかと言うと、酒類缶詰その他雑貨の需要盛んなること法外にして、商店の数は瞬く間に10倍20倍にもなって、いずれも大繁盛を極め、特に渡辺商店の如きは、去年の売り上げ月7百円、この様な突然の大繁盛は枝幸において初めてというのみならず、函館でも札幌でも聞いたことがないという。

○金の指輪をはめぬ者は犬と猫

砂金1匁といえば4円30銭、内地ではなかなか尊いものだが、砂金発見当時、1匁や2匁を採るのは何でもないので、気が向いた時には惜しげもなく人にくれてやる。そこで、芸者娼婦は言うに及ばず、下男下女でも、権助定吉でも、金の指輪の一つや二つピカピカさせない者はない。ただ、犬と猫だけはその限りにあらずという有様である。

○枝幸大繁盛の中心

枝幸大繁盛の有様は述べたとおりであるが、女郎屋を抜きにするのは龍を書いて目を入れぬ様なものである。元来枝幸には7～8軒の女郎屋があったが、その需要が急激に増したため、その数たちまち14～5軒になったのだが、到底数百千人の需要を満たすことはできない。

経済学者の需要と供給の原理は争えないもので、玉代は砂金1匁と相場が立ったが、需要はそれを上回り、夜となく昼となく詰めかけて、先客が去るのを待ってぼんやりしている者大勢である。その大勢が支払う玉代だけでも大したものだが、玉代だけ払ってスゴスゴと帰る者はほとんど無く、大半は大尽気取りで贅沢を決め込み、気が大きくなると、大盤振る舞いするためか、大声で「秤を持ってこい！」などと怒鳴る始末である。

余談ではあるが、枝幸では現金が不足し、日常の取引は砂金で済ませるのであるが、砂金掘りにとっては、山から拾ってきたものであるから、平気でドシドシ使い果たす。女郎の機嫌を取るためには、2匁や3匁の砂金は何とも思っていない。このような有様で

あるから、女郎の借金など半年たたずに完済だという。とにかく砂金の大部分は、必ず女郎屋の門をくぐるので、女郎屋は枝幸大繁盛の中心と言うのも無理のない話だ。

○枝幸の航路

今まで述べてきたことはもっぱら枝幸に関するものであるが、今日は枝幸へ行って一儲けしようと勇める諸君のため航路及び運賃について一言する。

さて枝幸と言うところは、北海道北見国枝幸郡の中心で、オホーツク海に面したところであるが、内地から行くには、神戸を起点として、四日市、横浜、萩の浜、青森、函館を経て小樽に上陸し、小樽から更に船に乗って至るものであり、船賃は下等にて神戸小樽間9円、横浜小樽間6円である。また、小樽枝幸間は3円20銭で、横浜から出発するのなら枝幸まで9円20銭となるのである。もっとも天気の都合によっては小樽で1～2泊することもあり、1泊50銭もあれば大丈夫であろう。おっと、もう一つ言い残したことがある。それは、はしけ賃である。これは横浜1回、小樽2回、枝幸1回、計4回で合計60銭必要である。

次に神戸以西の人のために一言すると、これは西回りと言って、神戸から尾道、馬開、境、敦賀、伏木、直江津、新潟、酒田、土崎、能代、函館を経て小樽に至る航路である。船賃12円で、小樽枝幸間その他の費用は同様である。

○渡航者の心得

今日枝幸に渡航したとて、発見当時の様に一攫千金という甘いことは少ないものと覚悟するべし。空想に駆られて無暗に飛び出し、着いてから話が違ふと落胆するようなことが無いよう心掛けることが肝要である。労働者として渡航するには、砂金掘りの人夫となるか、鉱区主に採取料を収めて勝手に掘るかの二通りがある。枝幸で働こうとする人のために一言すると、枝幸に行く前に、あらかじめ事業者と十分な契約を結んでから出発すべし。募集者の甘言に騙されて後日悔いを残すことの無いようくれぐれも忠告する。

枝幸の気候はどうかと言うと、およそ半年間は雪に埋もれて採取はできない。4月頃から雪が解け始めるが、川は増水し4月一杯は容易に掘れない。今年もこのため、早くに渡航した連中が非常に困り、誠にお気の毒な話である。

気温はどのくらいかと言うと、今の気温は本州とは大いに異なる。日中でも10度を上回ることは少なく、夜間はマイナスとなることが珍しくない。しかし、5月頃になると、だんだん暖かくなり、東京と大差ないというのも言い過ぎではない。

次に砂金地において、砂金をどっさり採って大金持ちになろうという大々の野心を実行するには、九段坂を上って息が切れる様ではだめだ。山道の険悪なること十分覚悟する必要がある。また、各鉱区事務所には数名の駐在巡査がおり、密採者を取り締まり、泥棒に追いかけるられる恐れもない。この辺は安心して良いが、だからと言って無暗に飛び出されては困る。

○1日平均の採取高

その前に、最近枝幸で評判だった出来事を述べる。昨年8月頃、ウソタンにおいて6～7人で砂金を採っていた内の1人が、ある日巨大なる金塊に出くわした。これは丁度203匁もある大金塊だったから、目がぐらついてしまった。しばらくして我に返り、つくづく考えるに、この先いくら稼いだとてこんな甘いことはないだろうと、独り占めにすることにした。そこで、こっそり山を抜け出し、大急ぎで会津に帰り、東京の商人に売り飛ばしてしまった。その組の連中大いに憤慨、訴訟を起こす、掛け合うと大騒ぎをしたが、その後どうなったかは定かでない。

枝幸砂金発見当時は、1日10匁も20匁も採った人の話は珍しくもなかった。今ではそう甘くはないものの、1匁以上はざらである。1日1匁とすれば1カ月30匁採れる勘定で、採取料を3匁とすると、27匁の手取りとなる。これを1匁4円30銭で売れば、118円10銭と参事官並みの月給という訳だ。しかし、初めて渡航しようとする人がこんなことを夢見ると大変だ。平均3分とみておくのが良い。1日3分ならば1カ月9匁である。採取料1匁を引くと月給34円40銭という訳だ。健康な体で熱心に働きさえすれば、1日3分の採取は間違いないだろう。

●砂金狂

ここに面白い体験談がある。これを紹介すれば砂金の歴史も解り、最近の状況も明らかになり一挙両得である。さて、その体験談というのは、書生の身で10年前から砂金を掘り、その間あらゆる危険を冒し、あらゆる苦勞をなめ、深山幽谷跋涉し、北海全道砂金あるところ、その足跡残さざることなく、一念動くところ砂金ならざるなく、一言発するところ砂金ならざるなし、人呼んで砂金狂、ただ砂金に忠実なるをもってその他を知らず、という砂金大熱心家の実録砂金史なのである。

○砂金狂の姓名

砂金狂、姓は樋渡名は彦五郎、薩摩の人である。弱冠の頃は田舎のガキ大将であったに違いない。明治23年帝国議会が開かれた際、地方代議士の随行で上京するなど、実業界で一旗揚げようとの野心がある。今般、「一朝遺利を拾わんとして」函館に向け出発した。

○政談演説で飢えを凌ぐ

明治24年12月、函館に到着、大威張りで勝田旅館へ繰り出した。しかし、懐中僅かに3円47銭5厘。この勝田という宿は、北海道第一の旅館にて宿泊料も安くない。3円余りの金では2日程しか持たないのである。樋渡先生平気な顔で威張っているが、内心大いに心配していた。するとお天道様人を殺さずと、オツな金儲けの手段を考え出した。当時函館区役所と警察署との間に衝突があり、区民の感情は警察署に反対していた。これを見た樋渡先生、「奇貨居くべし」と、警察攻撃の看板を掲げて政談演説をやらかした。何が受けたか解らぬが、10銭の木戸銭で満場立錐の余地なしという大盛況、難なく32円の利益を巻き上げた。その資金を元手に監獄教誨師和田某と結託、数百町歩の未墾地を買い、囚人を集めて開墾しようとした。しかし、その結果はうまくいかなかった様である。

翌、明治24年4月頃、札幌目指してノコノコ出かけた、これは別に何か目的があった訳ではなく、何ぞ甘い仕事はあるまいかと、盲滅法の旅立ちであった。何が幸いするか分からない。この盲滅法の旅立ちこそが、己が砂金狂とまで呼ばれる第一歩となるのである。

○失敗の結果砂金にぶつかる

さて樋渡氏、明治24年4月、北海道の花の都札幌へと乗り込んで、何か甘い仕事はあるまいかと四方を見渡した。しかるに、ただ山遠く野広くして、地勢雄大なるに驚くのみで、甘い仕事を懐中無一物の書生に残しておく様な心得の者は無かった。しかし、何かやらねば喉の下が承知せぬ。丁度その時、炭鉱鉄道会社の夕張線工事あり、その請負工事を始めた。請負工事と言えばえらそーに聞こえるが、その実は下請負にて僅かの資本で出来るのだ。5月頃から3カ月ばかりやってみたが、損失に次ぐ損失で、失敗のどん底におちいった。そこで行く末を案じ、何か濡手粟的な仕事はあるまいかと思案していたところ、一人の人夫がやってきて、「旦那！ 夕張川には砂金が出ますよ！！」とのこと、樋渡先生目を三角にして、「何！ 砂金、砂の金か、金なら甘いぞ、砂金とは一体どんな物だ。」と大乗り気である。

○砂金採取の初陣

さて、この人夫、羽前の国は最上の男にて、砂金について多少の経験あり。よってあらましの話を聞き、ひとまずその人夫と掘りに行ってみた。すると、ナールほどピカピカする物がある。樋渡先生サーたまらない。天下の事業これに勝るものなしと、夜も寝ずに道具を作り、米1斗5升を背負い、いよいよ砂金採取の初陣に出かけた。正にこれ9月15日の早朝であった。

夕張川に沿って無人の境に入り込み、千辛萬苦従事したれども、何分にも不慣れのうえ器具不良なるがため、十分の成績なく、14～5日で僅か14匁を採取したのみだった。おまけに砂金の買い手無く、追分村の薬局に懇願し、1匁1円80銭の大安値にて

引き受けてもらい、これを人夫と折半したうえで、綿入れ羽織1枚とシャツ1枚を買おうと、残ったお金はわずかに16銭であった。砂金狂樋渡先生初陣の結果、まずこんな哀れな次第である。

○砂金掘りの達人と邂逅す

冬になると砂金掘りはできない。樋渡氏何か他の道で食わねばならぬ。しかし、これぞという職業経験無く、またぞろ例の政談演説やらかして、苫小牧村では15円の金を得た。さらに、炭鉱鉄道会社の丸太運搬を請け負って年を越し、翌25年の春に魚屋を思いつき、白老村の漁師から魚を借り、自ら捌いて夕張炭鉱の鉱夫小屋を持ち回るが、どういふ訳か1匹も売れず、魚屋営業は初日で失敗した。そうする内に気候も良くなって、4月20日砂金掘りに出発し、夕張滝下というところまで来た。ここは旅館も無く、道端の小さな饅頭屋に一夜を求めたところ、不思議なご縁で砂金掘り横山某と邂逅したのである。

○砂金掘りの練習す

樋渡氏が饅頭屋へ入ってみると、既に泊まり込んでいる人がいる。その人は非常に困っていた。どうしたかと聞けば、朝から小便が塞がって難儀しているという。それは誠に気の毒千万、病院に連れていこうと、炭鉱会社の線路番にトロッコの借用を求めたが、無情にも断られた。病人は時が過ぎるに苦悶の度を増し、薬など千金丹はおろか鼻糞丸一粒も無いのである。そこで樋渡先生大いに工夫し、こよりをこしらえ、これに蝟燭の蝟を塗って病人の尿道に突き刺した。すると不思議にも小便噴出するわ蒸気ポンプの如く、病苦は一瞬の間に退散した。但し、この手術は勝算あつてのものでなく、急に迫られた全くの冒険だったのである。冒険にせよ何にせよ、横山にとっては命を助けてもらったも同然で、大いに喜び互いに身の上話をしたところ、横山は奥州南部の人で砂金掘りの経験豊富、この度人夫5人を連れてこの地方の探見に来たとのことで、樋渡氏それらの監督となり、砂金の練習をすることになったのである。

○大いに砂金を得たり

樋渡氏その後しばらく横山某のもとで、人夫を取り締まりつつ砂金の練習をしていたが、やがて独立して採取を試みるに至った。その年、すなわち明治25年6月15日、3人の人夫を率い、米を背負って夕張川の水源を探索、辛苦を乗り越え10日間、得るところなく食料尽き、大いに失望したのである。

やがて再行を期したが、労多くして得るもの少なしと、人夫辟易して共に行こうとする者なし。樋渡氏困り果て、政談演説で鍛えた弁舌にて、縦横説巧一攫千金の旨味を並

べ立て、やっと1人の同意者を得た。そして、準備もそこそこさっそく出かけ、打って変わった穴場にぶち当たり、僅か3日の間に51匁の大量を得、夢かと疑うばかりに、山を下りたのである。

○知り合いの宿屋に門前払いを食わされる

せっかく宝の山に当たりながら、僅か3日で帰るとは、樋渡先生随分寡欲の人と見えるが、何故と尋ねてみると、鉱区の出願をするとのこと。ところが誠に御生憎、誰かに先鞭を付けられて、遺憾千万残念至極。とにかく獲物をお銭に変えようと札幌へ。かねて知り合いの旅館に入ろうとしたが、一言の下に門前払いを食わされた。第一人相を見て恐れこんだ。その風体たるや腐れた洋服破れた股引き、顔は盛夏の烈日に照り付けられ、まるであぶり返った不動明王の如く。頭髮は4カ月間刈ったことがなく勝手放題に伸びて茫々然。どう見ても人間とは思われぬ。これはこの度北海道で生け捕りました荒熊でござる。サー皆さん御覧遊ばせと縁日の見世物に出しても大当たり間違いなしという代物であった。

○金を得て人を失う

札幌へと乗り込み、湯でも浴びて連日の疲れを癒さんと勇んだとたん、宿屋に断られるとは、流石の樋渡先生ガッカリした。ところが得意の雄弁が役に立つ。「実は拙者の落ちぶれた様に見えるところに値打ちがあるのだ・・・そういう訳で、幾日も人跡未踏の山川跋涉し・・・」と砂金掘りにでかけたる由を事細かに並べ立て、そのうえで砂金とはこんなもんだと実物を示した。宿屋の亭主、雄弁に吞まれて感心していたところ、実物を示されたからたまらない。俄かに三拝九拝して、「いや実はお断り申した訳ではなく・・・あれは何でござります・・・」と、何とかかんとか胡麻化して、お世辞の5、6百も並べ立て、大いに取りもった。樋渡先生その夜は久しぶりに屋根の下で布団にくるまり、良き心地で安眠し、その翌日に南1条の中野時計店に砂金を持ち込み、1匁2円20銭で売り飛ばし、金132円を得た。後に砂金狂とまで呼ばれた男が、銭らしき銭を手にしたのはこれが初めてであった。樋渡先生大いにホクホク悦に入り、得たる金を折半して人夫に与え、直ちに次の出発を相談した。ところが意外や千万人夫殿、何分御免こうむりたしの一点張りであった。何事か、それは大いなる獲物を発見した初日の事であった。

○熊に会って正気を失う

樋渡一行と聞くといかにも大げさだが、実は大将1人兵隊1人の総勢2人である。当日山に入って小屋掛けも出来、それぞれナタを持って薪取りに出かけた。すると背高6尺にもなる茶色の大きな熊が、子犬程の子熊を連れてタモの木の根に横たわっておった。こ

の有様を見た人夫殿、ナタを捨て、雲を霞と逃げ出した。その早き事疾風の如く、電光の如くであった。ほど遠からぬところにいた樋渡先生何事かと思ったけれど、格別気にもせずナタで枯れ木を切っていた。すると静寂たる山中にウォーンと一声、山河も振動せんばかりの恐ろしき声聞こえ、樋渡先生大いに驚いた。熊笹の間から四方を見回すと20間ばかり離れたところに牛より大きい大熊の姿を見たからたまらない。やにわに傍らの木に登った。木に登れば逃れられると思った訳ではないが、恐怖に打たれて正気を抜かし、全く無意識の行動であった。しばらくすると正気に戻り、大声で怒鳴り散らした。熊は人の声を聴けば逃げるという事を思い出したからである。

○熊を恐れて終夜眠らず

樋渡先生恐る恐る木から降り、最後に熊が居た辺りを見るに、何にも見えないから胸を撫でおろし、大声を発して人夫殿を呼んだ。ところが山彦がこだまするばかりで姿はない。そこで多分熊にやられたと思い、樋渡先生ノコノコと小屋に帰ってみると、人夫殿腰を抜かして真っ青になり、ブルブル震えながら、「夜を徹しても帰りたい熊の餌食は真っ平だ」と大いに騒ぎ出した。樋渡先生いろいろ論しても聞き入れず、果ては烈火のごとくしかりつけ、それで人夫殿ようやく正気に戻り、帰るとは言わなくなったが、一步も小屋から出ず、バチバチ火ばかり焚いていた。その夜は一睡もせず、時々樋渡先生をゆすり起こしては恐怖を紛らわせていたが、やがて東天紅を拝み、無事にその夜は過ごせたようだ。

○砂金採取者の扮装

そういう訳で人夫殿、熊が怖い熊が怖い一点張りで、お金よりは命が大切と至極まじめの考えであった。樋渡先生人夫を取り逃がしては大変と説教を繰り返すも、如何なる雄弁も人の肝っ玉を太くすることは出来ぬと見えて、人夫殿遂に夜逃げをしてしまった。これには樋渡先生驚いて、帰ってくるかもしれないと数日待ちぼうけていたが、何の音沙汰もない。そこで人夫の事はあきらめて、7月10日朝5時半胆振方面を目指して単身札幌を発った。

ここでチョイとその扮装を一言する。さても御大将樋渡公その日の扮装は御身には紺小倉の巡査の古服をまとい、腰から下も巡査の白ズボン、腰には萌黄色の唐縮緬をグルグル巻きにして短刀を差し込み、御背に背負いしお荷物は、ネコ1枚、板1枚、カッチャ2丁、釣り道具1式、綿入れ1枚、脚絆3尺、牛缶1個、塩1瓶、仁丹1個、コロダイ1瓶、小刀1丁、日記帳1冊、半紙1状の品々がある。弁慶の道具より余程多い。これを背負って、砂金狂樋渡先生の旅は続くのである。

意識 北海道砂金案内 附録

著 へるふね

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
